

秋の企画展

世界遺産白川郷

合掌造りと大家族

2003.10.1 ~ 12.25

< 1. 世界遺産白川郷 >

江戸期、白川郷と呼ばれていた地域は、現在の岐阜県白川村・荘川村・清見村の一部を含んだ地域でした。その地域を南北に流れる庄川に沿って、江戸中期以降、合掌造りが建てられました。現在合掌造りがまともに残っている地域は、白川村荻町集落で、約60棟の合掌造り(主屋)が見られます。平成7年(1995)同集落は富山県上平村菅沼(すがぬま)・平村相倉(あいのくら)とともにユネスコの世界文化遺産に登録されました。その影響もあって、毎年多くの観光客が訪れ、現在では岐阜県有数の観光地となっています。



白川村荻町集落

< 2. 合掌造り - 移築保存から現地保存へ - >

「合掌造り」とは、小屋内(屋根裏)を積極的に利用するために、又首(さす)構造の切妻造り屋根とした茅葺きの家屋のことで、庄川流域の白川郷と五箇山地方にのみ存在する特色のある民家形式です。広く確保された屋根裏は養蚕に利用され、採光や通風が工夫されています。桁下の軸部は大工によって作られ、屋根は村人たちによるユイ(結い)と呼ばれる共同作業で作られます。合掌造りの軸部の部材は貫などで組み合わせられ、合掌材(又首)は、ネソと呼ばれるマンサクの若木をねじったもので連結される柔構造です。この構造は、地震や風などの揺れに対しても復原力があり、合理的な建築工法でした。また、釘を使っていないので、解体する際に木材を傷めることが少なく、移築が容易でした。

昭和20年代後半から30年代前半にかけて、庄川流域の電源開発のため、多くのダムが建設されました。白川村内にも椿原、鳩ヶ谷、御母衣(みぼろ)の3つのダムが造られ、その結果多くの集落が水没しました。ダム造成のため、立ち退きせざるを得なくなった合掌造り民家は、村内外に移築されました。さらに昭和40年代前半にかけては過疎化が進み、いくつかの集落は集団離村しました。大正時代、白川村内には約300棟あった合掌造り家屋も、昭和36年(1961)には191棟に激減しています。移築・転用が容易な合掌造り民家の特質も、その動きが促進された一因となりました。移築された民家は、野外博物館や公園の中で公開されたり、料亭などとして利用されました。しかし、中には引き取り手がなく、焼却された合掌造りも少なからずありました。そのような厳しい状況に危機感を募らせた村人たちによって、昭和46年(1971)、「荻町集落の自然環境を守る会」が発足され、合掌造り民家を「売らない、貸さない、壊さない」という3原則を掲げて、合掌造り民家の集落景観を地域ぐるみで保存する動きが展開していきました。その運動は、昭和51年(1976)の「重要伝統的建造物群保存地区」選定、平成7年(1995)の「世界遺産」登録へと繋がっていきました。



旧西岡家住宅(飛騨民俗村)



旧大戸家住宅(下呂温泉合掌村)

< 3 . 白川郷の大家族制 >

白川郷には、「大家族制」と一般に呼ばれる家族制度がありました。長男のみが嫁をむかえて一家の跡継ぎとなり、その他の男子は、実家に居候しながら好きな女性の家に通い、生まれた子供は女性の実家の一員とされました。家長夫婦と長男夫婦の直系家族を中心に、長男以外の男子、他家の長男の嫁とならなかった女子とその子どもたちを取り込みながら、一家の人数が膨れ上がりました。最大例では、明治45年の遠山家に40人の家族が暮らしていた、という記録があります。このような家族制度が発達した理由は、養蚕のための労働力を確保する必要性と、江戸中期以降の分家制限令によって、持ち高二十石以下の家の分家が制限されたためと現在では解釈されています。

白川郷の中央部以外は、水田が少なく、焼畑と養蚕を主な生業とする地域でした。ここでは、石高が少ないため、分家が制限されていました。しかしこれは、すべての耕地が米の取れ高を基準に算定されていたためで、実際には焼畑と養蚕、狩猟などの複合生業により、検地帳などに記載されている石高より豊かな収入を得ていた家が多かったと考えられています。また、豊かな家でなければ、現実に大勢の家族を養うことはできませんでした。家族の平均人数が最大となったのは、海外に生糸を輸出することによって養蚕業がピークを迎えた明治期（19世紀後期）以降でした。また大家族の中には奉公人やもらい子を含むなど、必ずしも血縁だけで構成される家族とは断定できない例もありました。明治末期以降、出稼ぎ者が増え、他地域との交流が深まるにつれ、長男以外の男子も妻子と同居できる暮らしを求めるようになった結果、白川郷の大家族制は崩れていきました。



遠山家住宅とその家族（大正時代）

< 4 . 大牧集落と大井家 >

当館に移築された旧大井家住宅のふるさととは、白川村の中心に位置する大郷（だいごう）地区の南端にある大牧集落です。大郷地区は、白川村の中でも広い耕地に恵まれ、戸数・人口ともに最も多い地域でした。新田開発が進んだ近世中期以降、大家族制はほとんど見られず、家同士の格差が比較的少ない地域であったと考えられます。大牧集落を含む地域では、大郷の中心地域にくらべると耕地面積が少ないせいも、多少は大家族制の傾向が見られました。

大牧は、明治6年（1874）刊行の『斐太後風土記』に、家12戸、人口百余人、と記載されています。荻町集落の南西隣に位置し、明治初期までは籠の渡しを使って、荻町と交通していました。昭和31年（1956）大牧集落は白川村で二番目に建設された鳩ヶ谷ダム湖の湖底に水没し、幕末に名主など村の要職をつとめていた大井家と太田家が、岐阜県外へ移築されることになりました。太田家は名古屋市東山植物園に移築され、現在に至っています。太田家には、幕末の頃の宗門人別改帳（注1）の下書きが伝わっており、その文書によって、大井家は「小助」（こすけ）という屋号だったことがわかります。また、大井家が当時「門屋」（注2）を数軒抱え、庇護していたことも明らかになりました。



左 / 大牧集落
（昭和20年代）
右 / 大井家の家族
（昭和28年）

注1）江戸期、キリスト教禁止の手段として、家ごとにその宗旨を明らかにさせ、各地域の寺に、その寺の信者であることを証明させたことを、宗門人別（しゅうもん にんべつ）という。改帳（あらためちょう）は、寺が管理していた各家の戸籍のようなものである。

注2）白川村では、奉公人が本家の許可を得て独立した世帯を持った場合、その世帯のことを門屋（かどや）と呼んでいた。

< その他の展示資料 > 白川郷の生活用具（枕びょうぶ・あんどん・銭箱・お膳など） 細江光洋氏撮影白川郷写真作品（飛騨・世界生活文化センター寄託）

< 写真提供 > 高山市郷土館 白川村教育委員会 大井栄一氏